



バスラ・オイルターミナルで働くイラク人のエンジニア。施工管理を担当する日本人コンサルタントと事業の進捗について確認した

り返された戦争により、港や石油施設の破壊、老朽化が進み、有能な技術者たちは次々と国を離れた。その結果、一時は原油生産量がピーク時の3分の1までに落ち込んでしまった。

しかし2003年以降、戦争の終息を受けて、原油生産量にも徐々に回復の兆しが見え始めた。イラク政府は国の経済の牽引力として、石油セクターの復興を最優先課題の一つに設定。国際社会の支援を受けながら施設などの復旧を図ってきた。その中でも急務だったのが、原油輸出の動線となる出荷港の整備だ。イラクの海岸線はアラビア湾の奥まった地点。沿岸周辺は水深5メートル程

原油を通じてつながる日本とイラク

バスラ・オイルターミナルは、

幸いにも戦争による被害はそれほど大きくなかった。しかし長年にわたり、維持管理を十分行えないまま操業し続けたため、2本の海底パイプラインが著しく老朽化。コンサルテイング業務を担当している日本オイルエンジニアリング株式会社の高田洋さんによると、「送油圧力は従来の7分の1程度。これ以上の圧力で原油を流すと、海底パイプラインが破損し、油が漏れて



原油輸出施設を復興の道しるべに

イラクは世界有数の原油埋蔵量を誇るが、長年の戦争により施設の破壊・老朽化が進み、原油の生産、輸出が大幅に減少している。JICAはイラクの復興を支える資源輸出のカギとなる海上オイルターミナルの整備に協力している。

海上に建つ巨大なバスラ・オイルターミナル。1975年に建設されてから、イラクの原油輸出の中核を担う

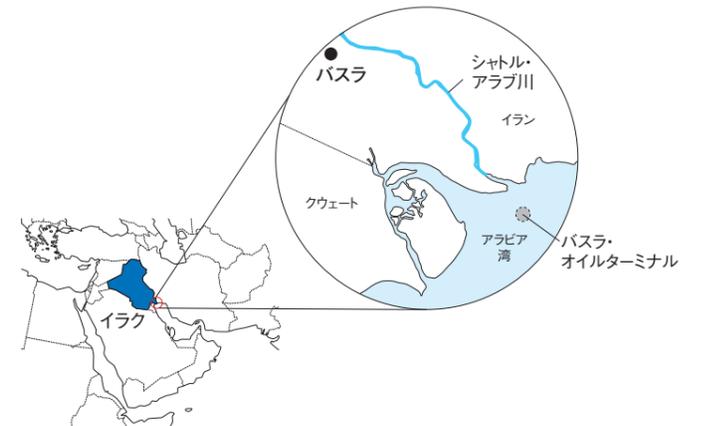
生かされていない貴重な資源

イラク第2の都市、バスラの沿岸から南へ約50キロ。シャトル・アラブ川からアラビア湾に抜けると、全長1000メートルの巨大な物体が海の上に見えた。バスラ・オイルターミナル。イラクの国土に眠る原油は、陸上から海底パイプラインを通じてここに運ばれ、世界各国へと輸出されていく。

イラクの南部地域は、3カ月という短い冬の期間を除いて50度を超える酷暑に見舞われる。その



バスラ・オイルターミナルには、タンカー4隻が着岸できる。日本の複数の商社がイラクの石油販売権を獲得



多国籍軍による支援を経て、現在は100人のイラク兵が警護に当たる

しまう可能性があるからです」と話す。

そこでJICAは、イラク南部の原油を安全かつ安定的に出荷・輸出できるように、全長75キロの海底パイプラインを新設することに。さらに将来的な原油取扱量の増加を見越して、積み出し施設の増設、海底パイプラインの操業監視システムの導入なども行っている。完成予定は2013年。現在の160万バレル/日に加え、200万バレル/日の原油の出荷・輸出が可能になるといふ。また、原油流出などの突発的な事故にも迅速に対応できるように、JICAの支援の下、石油省、運輸省、環境省、外務省、港湾公社などが協働で新たな制度・組織の立ち上げも準備中だ。

経済制裁を受けて国際社会から隔離され、技術革新に取り残されたイラク。それ故に、人々の学びに対する貪欲さは並大抵ではない。その姿を目の当たりにしている高田さんは、「日本にはない豊富な資源はイラクの最大の強み。第二次世界大戦後、復興を成し遂げた日本からの支援が道しるべとなれば」と期待する。

現在、日本は約9割の原油を中東地域に依存、イラクからの輸入も増加傾向にある。さらに、両国を結び付けるのは古くからの深いつながり。「70〜80年代に進出



海底に敷設されたパイプラインがオイルターミナル上の出荷設備につながっている



した日本企業が建設したプラントが、今でも南部を中心に随所に残されています。戦争中も壊れることなく稼働し続けており、日本の技術力、日本人への信頼も厚い」と高田さん。その証しともいえるのが、東日本大震災に対するイラク政府からの支援。1000万ドルの義援金のみならず、今後、日本企業に石油販売権を優先的に分配したいという意向を示している。

復興をキーワードに、共に支え合う日本とイラク。原油という貴重な資源を糧に、イラクは力強く前に進んでいる。